

④ 『旅立ち』

時刻は七つ半になろうとしていた。ほどなく夜は明けはるが、下働きの五助がかざす提灯の灯りが届かない周辺は、まだかたくなに夜の色をまとったままだった。

「お父様、お母様、行って参ります。」と言って深々と頭を下げ、くぐり戸に向かったミチの背後で由永の声がした。

「待ちなさい、ミチ。多門次、門を開けなさい」

今日はミチにとって俳人として生きるための門出の日だ。その大切な日に、普段のようにくぐり戸を通ったのではじめにならない。由永はそう考えた。

言われた多門次が動き出すよりも早く、五助が門へ走った。扉を大きく開き、ミチを振り返った五助の顔が、提灯の灯りに浮かび上がった。溢れ出した涙で頬が光っている。

田耕に暮らす頃は、ミチが起き出すまでに山を一回りして、畝に掛かった野兔や山鳥を土産にするのがいつもの五助の日課だった。

獲物が無い時などは、山で拾った椎の実を囲炉裏で炒ると、ごつごつと節くれだった指で、器用に皮を剥いては幼かったミチに食べさせた。

そのごつごつの指で、次々に込み上げる涙を乱暴に左右に払いのけながら

「まだ暗うございます。せめて小月の宿までお供をさせて下さい、お願いですミチ様」とうめくような声を出した。

「有難う五助。夜は間もなく明けます、心配要りませんよ。それに、私はこれから仏に仕える身です。暗闇を恐れるようでは修業になりません」

言われた五助は、がくりとうなだれ、両の手を膝がしらで支え、広く大きな肩を小刻みに震わせた。手にした提灯までが一緒に震えている。

ミチが生まれる日には産湯を沸かした。生まれてからは背に負うて子守をした。祭りも一緒に見物をした。祝言の日には、嫁入り道具の荷車も曳いた。利之助が死んだあとの畑仕事は全部やった。

五助に家族は無かったが、ミチのことは、全くわが子のように気になって仕方がなかった。そのミチが、事も有るうに一人旅に出ると言う。

ご主人様は何でそれを黙って許す。ワシならミチ様の独り旅なんか絶対に許さん。出来ることなら由永の胸倉を掴んで、そう言ってやりたい、と思う。

膝がしらに置いた両の手にいよいよ力が入って、五助の嗚咽が次第に獣の唸り声と区別がつかなくなった。低く、周囲の空気をゆらしている。

多門次と並んで立っていたはずの、母親のタカの姿がいつの間にか見えなくなっていた。娘の門出に涙をこらえる自信がなかった。仏壇に向かい、崩れそうな気持を読経で支えた。

街道に面した門から一陣の風が吹き込んでミチの頬をそつと撫でた。秋が近づいていることを教える少し冷たい風だった。その風に促されて、ミチはきっぱりとした足取りで門を抜け街道に出た。

通りに出ると行く手に目を凝らした。田耕から長府の家に移つてもう二年になる。いまではすっかり見慣れた町の様子が、今日はまるで違つて見えた。

星空にぼんやり浮かび上がる街道の両側の家々が黙りこくつて、息をひそめてミチの動きを見つめているようだった。どの家にもまだ明かりは見えない。ミチの家の門からだけ通りに明かりがこぼれて、その明かりの中に浮かび上がったミチは、もう一度父親に向き直ると深々とお辞儀をした。今度は無言だった。

歩き始めたミチを追つて五助が通りに飛び出してきた。言いたいことが胸の中に溢れるほど渦巻いている。兎に角、ミチをひよいと抱えて連れ戻したい。

だけどそれは出来る相談ではなかった。

ウォーン、ウォーンと、我を忘れた五助のうめき声が、遠

ざかるミチの後姿を追った。

五助に続いて弟の多門次も飛び出して来た。ミチが嫁ぐのと入れ替わるように生まれたから、もう十二才になる。

武士らしく、肘を少しまげて両の手を袴にきちつと当て、遠ざかるミチの後姿に深く頭を下げた。

「姉上、どうぞお元気で。ご無事で戻られますよう・・・」  
と言いながら次第に声は詰まつて、最後のあたりはもう一度吹いた風に飛ばされたのか、聞こえなかった。